

国語

出題の傾向

国語は、例年現代文と古文各一題と、その他に文法・漢字・文学史などを大問として出題することを原則としています。本年度も大問を三題とし、第一問が現代文、第二問が四字熟語、第三問が古文の出題でした。全体として漢字・語句の意味・空欄補充・該当表現の抜き出し・論旨把握・慣用句・指示語・主語・文法・文学史など、基本的な事柄から幅広く出題しました。

2017 今年度の出題と解説

【一】

出典は、斎藤孝の評論『考え方の教室』からでした。

人前で話をするときに一番大切なことは「身体をひらく」ことであるという筆者の考えを具体例を通して理解し、さらに「聞き手であってもつねに話し手側の視点を持って聞く」という「よき聴衆」になるという筆者の主張を読み取ることができるかを問いました。

問一の漢字の書き取りは、全問正解してほしい問題です。採点では止め・はね・払い等も厳密に見ています。画数が変わったり、丸文字を書いたり論外です。画数は変わらなくても、形が変わっていれば不正解です。漢字は単に正確に書くということだけではなく、文脈に合った正しい語句を知っているかということも重要です。問二は例年通りの出題です。品詞を見分けることは口語文法の基本でもありゴールでもあります。しっかり身につけておいてください。問三は前後の文脈から解ける問題です。問四・問五・問六は普段から文章を読む習慣が付いていれば、難しくはないでしょう。問七は本文の内容をしっかりと理解していれば解けます。ただ、箇所はあっているのに正確に抜き出せてない解答や、字数不足の解答がありました。字数指定をもっと意識するようにしてください。問八・問九・問十・問十一は本文の内容をしっかりと理解して、正しいものを見つけていきます。問十二の記述問題はそんなに難しくなかったと思います。ここでのポイントは、すぐ後の形式段落に答えがあるということに気付くことです。そして字数制限がないのでキーワードとなる語句を含めてまとめるという力が必要になります。また、文末が「聴衆」で終わっていない場合や最後の「。」がない場合は減点の対象となります。問十三は本文の内容とよく照らし合わせて、正しいものを見つけていきます。

【二】

今年度は四字熟語を出題しました。この種類の問題は正確な知識がついているかどうか問われます。〈覚えなかつもり〉では、なかなか正解できません。普段からしっかりと知識を身につけてください。

【三】

問一は例年通り、歴史的仮名づかいを現代仮名づか

いに直す問題でした。問二は言葉の意味を問いました。⑥「おはする」は尊敬語です。④「いみじき」は文脈によって訳し方が変わる古語です。ここでは良い意味で使われているので、エの「すばらしい」が正解となります。問三は抜き出す箇所を見つけることはできていたのですが、正確に抜き出せていない人が多く見られました。例えば「いふ」を「いう」としたり、「事」を「こと」としたりする間違い。抜き出し問題の場合は特に気を付けましょう。問四は昨年度も出題しましたが、古典知識に関わる問題です。「衣」には、現代の感覚でいうとお金のような値打ちがあるということを覚えておきましょう。問五は指示語の問題です。「まき人」が「この君」と呼ぶ人物を探せば解答できます。ただし、問三と同様に抜き出し間違いには気を付けましょう。問六は難度の高い問題です。副詞の呼応(陳述の副詞)に関する問題でした。「つゆ～ず」という表現は「まったく～ない」と現代語訳できます。これは現代語にも残されている表現で、「そんなこととはつゆ知らず。」などと使われますが、めったに目にしない言い回しでもあります。問七は古典知識の問題でした。問八は夢占いの内容が理解できていれば解答できる問題です。本文七行目の「必ず大臣までなり上がり給ふべきなり。」と対応しています。問九は本文のまとめにあたる部分の解釈の問題です。「国守の御子の太郎君」が「まき人」に将来についての良い夢を聞かれてしまったことから、夢を取られ、大臣になるという未来までも取られてしまった、という内容が読めていたでしょうか。そこから、うかつに夢を人に語るべきではないという教訓を読み取りましょう。問十はそれらしいことが書かれていても、本文中にその記述がなければ正解にならないことに気をつけましょう。問十一は文学史の知識が必要です。有名な作品が成立した時代は覚えておきましょう。

対策と アドバイス

- 普段から日本語に関心を持ってください。日常生活の中には国語があふれています。いろいろな分野の本や毎日の新聞をじっくり考えながら読んでください。名文と言われる文章を書き写してみるという方法も有効です。その際に、段落に分けたり要旨をまとめたり、意味の分からない語句を辞書で調べるといった心掛けは重要なことです。また、文法も確実に理解しましょう。こういう方法で読解力・語い力・表現力を身につけていきましょう。そうすれば国語力は大きく向上すると思います。また、古典は「慣れ」が一番です。文章を何度も声に出して読んでください。口語訳を考えながら繰り返し音読すれば、自然と力が身につけているのが実感できるはずです。
- また、小手先だけの受験勉強にとらわれず、高校での勉強につながる学習法も大切なことではないでしょうか。本校では例年そういった面も問えるような出題を考えています。中学生として知っていなければいけないことを確実に覚えてください。そのためには、教科書を中心に、繰り返し学習するのが最善の方法だと思います。